

田辺市20周年記念特別展

河野愛 灯台へ、

会 期／2025年4月12日(土)～6月8日(日)
開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休 館 日／毎週月曜日(ただし5月5日は開館) 4月30日(水)・5月7日(水)



河野愛《こともの foreign object (clock)》 2024(令和6)年 インスタレーション 個人蔵

・河野愛によるアーティストトークを開催します ※「国際博物館の日」記念

田 辺 市 立 美 術 館：5月24日(土)午前11時から
熊野古道なかへち美術館：5月24日(土)午後 2時から

いずれも予約不要、観覧料のみ必要です。

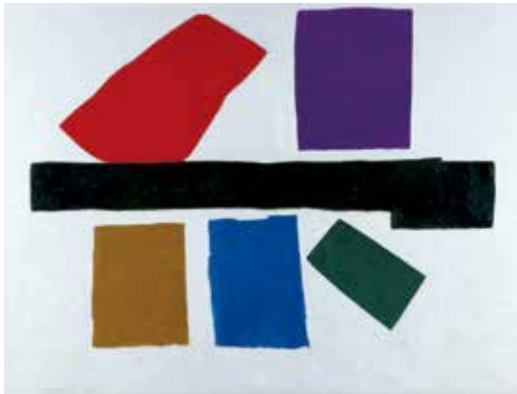
田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館

2025年度展覧会案内

田辺市20周年記念特別展

生誕120年 村井正誠 ー画家にして版画家ー

会 期／2025年4月12日(土)～6月8日(日)
開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休 館 日／毎週月曜日(ただし5月5日は開館) 4月30日(水)・5月7日(水)



村井正誠《紀州》 1993(平成5)年 和歌山県立近代美術館蔵

・講演会を開催します ※「国際博物館の日」記念
「村井正誠と版画」
講師：榎野比佐見 (和歌山県立近代美術館主任学芸員)
5月17日(土)午後2時から

・当館学芸員による展示解説会を開催します
5月31日(土)午後2時から

いずれも予約不要、観覧料のみ必要です。

田辺市立美術館

田辺市立美術館へのきもち③

私は、田辺市を主な聴取エリアとするコミュニティ FMラジオ局「FM TANABE」で、取材活動や番組制作を担当しています。田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館には、展覧会やワークショップを取材させていただき、ラジオから両美術館の情報を発信しています。

私が初めて取材をさせていただいたのは、2023年2月に展示が始まった「雑賀清子ー草花によせるー」でした。同時期に新庄総合公園では「全日本花いっぱい田辺大会」が開催されていて、私は会場から放送する特別番組を企画していました。

盛大な花いっぱい大会の魅力をラジオを通して発信するため、企画に忙殺されていたのですが、番組の中で雑賀清子展を紹介させていただくこととなり、そこで雑賀清子さんの描いた草花に出会いました。そこには、足元の小さな花や雑草と呼ばれて見過ごされがちな植物が、たおやかに優しく描かれていました。番組の準備で息つく間もなく走り回っていた私にとって、まるで突然台風の目の下に身を置かせてもらったような、心がホッとする時間でした。それから、田辺市の美術館ではいったいどんなものを見せてくれるのだろうと、毎回の展示が楽しみになりました。

原勝四郎・稗田一穂・野長瀬晚花など、田辺ゆかりの近代の画家の作品を見るときは、先人たちが愛した風景や人、戦時の苦労、海外への眼差しなどを感じ、「いま」という時間の大切さと平和の尊さをあらためて感じています。また、文人画を見る時は、小指の爪くらいの小さな登場人物を「ウォーリーを探せ」のように探し、心の中で彼らに吹き出しを加えて「こんなことを言っているのでは」と想像の世界を楽しんでいます。

昨年は「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録20周年の節目に企画された展覧会、小企画展「熊野の風景」や特別展「仙境 南画の聖地、ここにあり」の取材をさせていただきました。那智の大滝が熊野の画題として多くの作家に感興を与えたことに加え、熊野古道を歩く昔の人々の様子や温泉の風景にはどこかユーモアも感じ、熊野の魅力が多角的に描かれてきたことに感銘を受けました。

熊野古道なかへち美術館で開催されている「くまびでつくろう！」のワークショップは毎回取材にうかがっています。先日は「つみきの

灯台」を取材させていただいたのですが、子どもたちが目を輝かせて自由につみきの灯台を積み上げ、その横では大人たちが子ども以上に積み木に熱中していました。新しい「熊野の美術」の種が、美しい山と川に囲まれながら、いま撒かれていることを実感しました。

私は美術にはとんと疎い人間です。いまでも展示を見て一番多い感想は「よくわからない」です。私の生活の回りには、便利で使い勝手が良く、目的への筋道が立ったモノで満ち溢れていますが、時には、自分にとって価値のわからない不安定なものと静かに向き合う時間が、新しい感性や忘れていた記憶を呼び起こしてくれるんじゃないかと、美術館の展示が問いかけてくれます。同じ展示でも、2回行くと気になる作品が変わったり、以前見た作品と久しぶりに会うと旧友に会ったような親しみを感じたりします。美術はわからない、だからこそ時間をかけると面白い、ということを両美術館から教えていただきました。

田辺市立美術館と熊野古道なかへち美術館に取材に行った帰り道は、いつも静かな満足感を覚えながら帰路につきます。その魅力をラジオで100%お伝えすることはとてもできませんが、せめて少しでも地域の皆さまにも「見に行ってみようかな」と思ってもらえるよう、作品そのものだけではなく、作家たちの個性や作品の背景もできる限りご紹介させていただいています。私見に寄りすぎたかも知れませんが、美術館の魅力をより感じていただけるよう、これからも取材と情報発信に努めさせていただきます。

(FM TANABE 副社長 大崎 健志)



いつも生放送を行っているスタジオにて

田辺市立美術館(本館)の来館者が30万人を超えました

今年1月、「近代洋画コレクション展」の開催中に、1996(平成8)年11月1日の開館以来の来館者が30万人を超えました。

30万人目の来館者となった田辺市内からお越しの古川茂代さんには当館が刊行した展覧会図録などの記念品をお渡ししました。

古川さんは美術館で作品を鑑賞するのが好きで、海外に行ったときも美術館に出かけられるとのことでした。地元の田辺市立美術館、熊野古道なかへち美術館へも普段から

お越しいただいて、近年では両館で開催した「稗田一穂展」が特に印象に残っているとの感想をいただきました。

当館が熱心な美術ファンの方々にご利用いただいて、支えられていることを実感する記念の節目でした。また来年の開館30周年に向けて、着実に活動を積み重ねてゆきたいと思います。引き続きみなさまのご高配を賜りますようお願いいたします。

(学芸員 三谷 渉)

館長より記念品を贈呈しました
2025(令和7)年1月17日

田辺市立美術館NEWS ORANGE Vol.42

編集・発行:田辺市立美術館

発行年月日:令和7年4月1日

田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館

〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

編集後記

今号も田辺市立美術館の広報紙ORANGEを手にとっていた下さりありがとうございます。4月から始まる展覧会はインスタレーションもある魅力的な内容になりそうです。関連イベントで展覧会をより楽しめる企画もあります！

皆様のご来館をお待ちしています。(F. O.)

ORANGE
田辺市立美術館NEWS

Vol. 42



佐久間美智子《Breathing-V》2023(令和5)年 田辺市立美術館蔵

(撮影:長岡 浩司)

Breathing

南紀白浜空港に近づく窓から見下ろした大地は険しい山と海原が隣り合う実に不思議な風景であった。激しい火山活動の隆起によってできた台地は、ピロードのような緑に覆われた山々が幾重にも幾重にも連なっている。山裾には青い海から真っ白な美しいさざなみが寄せて波音が聞こえてくるようだった。南紀熊野を空から俯瞰した風景は、自然の作り出した造形であり、力強く、そして優しい。古代から聖地として人々が崇め、現代においても人々が心を寄せる安らぎの世界である。

制作を続けて50数年が経つ。様々な素材や技法を使ってきたが、常に作品の根底にあるものは全ての命の源である「大地」であった自身にとって、心に染みわたる安らぎの風景だった。

1970年代から80年代にかけて「ファイバーアート」は全盛期であった。1971年、スイスのローザンヌ国際タピスリー・ビエンナーレに展示された作品群は、装飾ではなく作家個人の自由な表現の世界であった。中世からタピスリーは職人の手によって受け継がれ、原画に沿って宗教的な意味や歴史を伝えてきたが、20世紀半ばを過ぎ、作家自らの想いや考えを自らの手で高らかに表現するアートへと変わったことを目の当たりにした。身体が震えるほどの衝撃と感動を覚えたことは、それからの自身の進む道を決定づけたと言える。

繊維はどれをとっても一本の糸、一塊の繊維であり、それだけでは何にもなり得ない素材である。組む、編む、織る、絡げる、縫うなど日本には糸編のつく漢字は数えきれないほどあるが、これら手を駆使する行為によって繊維に構造を持たせることから様々なものや形に変化させていくことができることに「ファイバーアート」の面白さと深さがあると思う。「ファイバーアート」の捉え方は人それぞれによって異なるが、この行為の中にどれだけの想いを入れ込むことができるかが作家に課せられた使命ではないだろうか。手の行為は作家の「ことば」であり、観る人にその「ことば」が伝わることで初めてアートとして成り立つのだと考えている。色や形、表面的な美しさや面白さで終わらずに「ことば」を発する作品創りをしたいと常に思う。

写真の《Breathing-V》はBreathingシリーズを制作し始めて30年を経て再び手がけたBreathing-Ⅲ、Ⅳに続く作品である。大学での仕事を終え自分のためにだけに使える時間を、終わりのない大地をテーマとしたBreathingシリーズの制作に専念したいと思ったのである。大地に潜む水やエネルギー、様々な生命の源、そこから生まれる気、そしてその大気の中で呼吸する生命、自然と人が呼応できる空間をつくりだしたいという想いの作品である。このシリーズは織の最も基本的な組織とマクラメから成る。糸を紡ぎ、織の経糸を使ってのマクラメが特徴である。織による強さと優しさ、マクラメによる流れと立体感。織の経糸、緯糸のしがらみから放たれて、縦横無尽な表現となる。延々と続く大地は少しずつ大きな作品となり《Breathing-V》に至っては13メートルの長さの中で、大地に潜むエネルギーと気がいっきに大気中に放たれていく。長い制作期間の中で大地の中に織り込めたものが大気中に放たれて行く瞬間は自身が大気の中に浮遊し始めたような快感を味わった。熊野古道なかへち美術館の空間での《Breathing-V》は熊野の自然環境と呼応しながらゆったりとした最高の表情をみせてくれたように思う。

(佐久間 美智子)

※今回特別に作者の佐久間美智子氏より自作についてのご寄稿をいただきました。

灯台——記憶の痕跡

3月20日に熊野古道なかへち美術館(田辺市立美術館分館)で講師のアーティストと一緒に作品を作るワークショップ、「くまびで作ろう!」の第3回目を開催しました。今年度も和歌山県立近代美術館と協力して進め、アーティストの河野愛さんを、県立近代美術館では昨年の夏に開催された展覧会「なつやすみの美術館14 河野愛「こどもの、と」」の招待作家として招き、田辺市立美術館では「くまびで作ろう! ③」の講師をお願いしました。

河野さんは場所や人の記憶や時間をテーマにしたインスタレーションを制作している作家です。人の使用の痕跡が残る古い物を使うことも多く、例えば、河野さんの祖父母の営んでいた白浜のホテルのネオンサインの一部〈I〉を、ある展示では灯台のように海辺の桟橋の先端にポツンと置き、また別の展示ではつみきを積むように高く積み上げて、インスタレーションに用いています。

ワークショップではこうした河野さんの制作や作品についてのお話をうかがった後に、参加者のみなさんとつみきを使って灯台を作りました。つみきは家庭や保育所などで使われなくなったものを集め、色のかすれ、ガラスの名前と思われる「めばえ」の文字や子どもの落書きなど、現在に至までの記憶や時間の痕跡が残されており、それらを目にしながら作品作りに取り組みました。



河野愛さん photo:堀井ヒロツグ

今回は、つみきに穴を空けて木ダボで繋いでゆく方法で行い、普段のつみき遊びのように積むだけではできなかった個性的なかたちの灯台が次々と作られてゆきました。最後に、完成した灯台を美術館の庭に置いて、ワークショップの感想を河野さんとともに話し合いました。

ワークショップが終了した後、灯台を鏡面になったシートの上に設置し、水面の上に立つようにして一週間公開しました。つみきと灯台、そして記憶や時間に思いを馳せるこのワークショップの体験を、ご来館いただいた方々とも共有できたのではないかと思います。

この4月からは、講師に来ていただいた河野さんの近年の制作を紹介する特別展「河野愛 灯台へ、」を、熊野古道なかへち美術館と田辺市立美術館の2会場で開催します。場所や人の時間、記憶が複層的に繋がる河野さんの作品群をぜひご覧いただけたらと思います。

(学芸員 知野 季里穂)

INFORMATION

特別展 河野愛 灯台へ、

会場／田辺市立美術館(展示室1-2)

熊野古道なかへち美術館

会期／2025年4月12日(土)～6月8日(日)

開館時間／午前10時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

休館日／毎週月曜日(ただし5月5日は開館)

4月30日(水)・5月7日(水)

観覧料／田辺市立美術館 600円(480円)

熊野古道なかへち美術館 400円(320円)

※()内は20名様以上の団体割引料金です

学生および18歳未満の方は無料

田辺市立美術館展示室3-5では「生誕120年 村井正誠 -画家にして版画家-」を同時に開催しています

REPORT 特別展「仙境 南画の聖地、ここにあり」

「紀伊山地の霊場と参詣道」のユネスコ世界遺産への登録20周年を記念して、和歌山県立近代美術館と田辺市立美術館の共催で、近代の南画の展開と和歌山の風景表現に焦点をあてる特別展「仙境 南画の聖地、ここにあり」を昨年の10月6日(土)から11月24日(日)にかけて開催しました。

展覧会は、和歌山県立近代美術館、田辺市立美術館、熊野古道なかへち美術館(田辺市立美術館分館)の三会場で、同時に開催しました。和歌山県立近代美術館を会場とする第1部では、明治から昭和にかけての近代南画の動向をうかがい、田辺市立美術館を会場とする第2部は、近代南画の世界に足跡を残した、和歌山とゆかりの深い画家たちについて紹介しました。そして熊野古道なかへち美術館を会場とする第3部では、近代の南画作品に描かれた、和歌山や熊野の風景を紹介しました。この南画の世界において、豊かな自然に囲まれた熊野が、仙人が住んでいるような理想郷である「仙境」に見立てられ、画家たちの憧れの対象となっていたことをお伝えできたものと思います。

展覧会の趣旨に関連して、会期中に、日本画家の松平莉奈さんを講師に招き、南画の山水表現を取り入れた立体的な「粘土山水」をつくるワークショップを、熊野古道なかへち美術館で行いました。まず展示室で松平さんと担当学芸員による解説とともに作品を鑑賞し、その後美術館の外に広がる熊野の山々をみながら、粘土でつくる「山水」をイメージしました。参加者はそれぞれ、木粉粘土をつねたりちぎったり、また綿棒やヘラで模様をつけながら、思い描く山水風景を表現しました。完成作品は松平さんによる講評とともに、参加者が作品に込めた思いを伝えるコメントをそえて、みんなで発表しました。「無心になって楽しむ



松平莉奈さんのアドバイスを受けながら「粘土山水」をつくるワークショップの参加者

新収蔵作品について

昨年度は、2点の作品を購入し、16点の作品をご寄贈いただきました。購入した作品の一つは、佐久間美智子(1945～)の《Breathing-V》(2023年/180×1300cm/タピスリー)です。昨夏に熊野古道なかへち美術館(田辺市立美術館分館)で開催した特別展「現代の織Ⅶ 佐久間美智子」に出品していただいた近年の制作を代表する作品であり、これまでの表現の集大成ともいえる内容を有しています。※今号の表紙に図版と作者から寄せていただいた言葉を掲載しています。

同じく「現代の織Ⅶ」の会場で展観した、《大地への帰帰-I》、《Breathing-I-1》、《Breathing-I-2》と、「現代の織Ⅶ」と同時に田辺市立美術館(本館)で開催した館蔵品展「織の表現 2024」に特別出品していただいた、《Sublimation-I》の4点をご寄贈いただくことになりました。これによって、当館に佐久間の織による造形表現を見通すコレクションの核が形成されたものと考えています。また当館の織の造形作品のコレクション全体としても、国際的に評価される現代の7人の作家、62点を収蔵することとなり、この分野の一層の拡充となりました。

購入したもう1点の作品は、一昨年度に特別展を開催した妻木良三(1974～)の近作《ZONE I》(2022年/103.0×73.0cm)です。※右下の図版

展覧会では、妻木の特徴的な鉛筆による襞の描写表現の源となっている、布の造形をインスタレーション作品として初めて発表していただきました。そのときの記録ともあわせ、本作品は妻木の芸術の中心となる

昨年度寄贈作品

	作者名	作品名	制作年	材質／形状	寸法(cm)
1	野長瀬晩花	短歌屏風	1963(昭和38)年頃	紙・墨／二曲屏風	各80.5×53.5
2	原勝四郎	風景	1961(昭和36)年頃	板・油彩／額装	49.7×60.8
3	野田裕示	WORK33	1974(昭和49)年	カンバス・油彩	240.0×181.5
4	野田裕示	WORK52	1975(昭和50)年	カンバス・綿布・油彩	240.0×763.0
5	野田裕示	WORK80	1980(昭和55)年	カンバス・油彩・アクリル	194.0×346.0
6	野田裕示	WORK81	1980(昭和55)年	カンバス・油彩・アクリル	194.0×346.0
7	野田裕示	WORK83	1980(昭和55)年	カンバス・油彩	194.0×112.0
8	渡瀬凌雲	四季山水図(春)	1918(大正7)年	紙・墨／軸装	134.4×60.7
9	渡瀬凌雲	四季山水図(夏)	1918(大正7)年	紙・墨／軸装	135.2×60.6
10	渡瀬凌雲	四季山水図(秋)	1918(大正7)年	紙・墨／軸装	135.6×60.7
11	渡瀬凌雲	四季山水図(冬)	1918(大正7)年	紙・墨／軸装	135.5×60.7
12	佐久間美智子	大地への帰帰-I	1986(昭和61)年	羊毛・麻／タピスリー	240×360
13	佐久間美智子	Breathing-I-1	1990(平成2)年	羊毛・麻・棕櫚／タピスリー	140×300
14	佐久間美智子	Breathing-I-2	1990(平成2)年	羊毛・麻・棕櫚／タピスリー	190×300
15	佐久間美智子	Sublimation-I	1996(平成8)年	麻・棕櫚・木の根／立体2点組	各30×20×h.140
16	妻木良三	始景II	2014(平成26)年	紙・鉛筆・アクリル	51.7×73.0

部分を伝えるものになってゆくと考えています。初期の作品、《始景Ⅱ》もご寄贈していただき、妻木の制作を紹介してゆく基礎をつくることができました。

上記以外に、これまで当館が調査、研究と展覧会の開催を重ねてきた、原勝四郎(1886～1964)、野長瀬晩花(1889～1964)、渡瀬凌雲(1904～1980)の重要な作品のご寄贈があり、和歌山県御坊市の出身の画家で、長らく多摩美術大学の教授として後進の指導にもあたってこられた野田裕示さん(1952～)から、画家として自身の作品を世に問い始め、認められた最初期の作品群のご寄贈のお申し出をいただき、5点の作品を選定して収蔵しています。※寄贈作品の詳細は下の表

昨年度も展覧会活動を通じての積極的な収集と、これまでの当館の活動を認めていただいたことによるご寄贈によって、多くの作品を新たに収蔵することができました。ご支援いただきました方々に改めて厚く御礼を申し上げます。

下欄にお伝えしますように、当館は本年6月上旬から、大規模な設備改修のために長期の休館に入りますが、作品の収集活動はこの間も継続します。引き続き当館の活動にお力を寄せていただけますようお願いいたします。

(学芸員 三谷 渉)



妻木良三《ZONE I》2022(令和4)年

改修工事のため休館します

田辺市立美術館(本館)は、2026(令和8)年に開館から30周年を迎えます。これまでおよそ5年に一度、半年間ほど工事のための休館期間をいただいて、施設の良い状態の維持と改善に努めてきましたが、今年6月上旬からは、これまでにない大きな改修工事を実施するために約1年4か月の予定で長期休館させていただきます。

今回の工事の主たる内容は、設備棟の中に収められている空調機、高圧受電装置、受水槽、自家発電機等の設備を一新することです。いずれも美術館が活動してゆくために不可欠なもののばかりですが、建物の竣工から30年間に亘って一度も更新されずにきているものが大部分で、今後大きな故障が起きる可能性や、故障があった際に迅速で適切な修理ができない可能性が高まっています。

特に空調機は、収蔵している作品(文化財)を劣化から保護し、次世代に継承してゆくという美術館の大きな使命を果たすために最重要の設

備です。現在稼働させている機械を停止して取り出し、新たなものを設置して再稼働させるには、それなりの時間を要しますが、その間、作品を温度変化、湿度変化の抑制できない状態にさらし続けるわけにはいきませんので、すべての作品を熊野古道なかへち美術館(分館)の展示室に移動して管理します。そのため田辺市立美術館本館、分館ともが長期の休館をやむなくします。どうかみなさまのご理解をお願いいたします。

この他にも、展示室内のケース照明のLED化や壁面の補修等を行う計画にしています。開館30周年の節目を、改修の終えた新たな美術館でみなさまとともに迎えたいと思います。長期間の休館でたいへんご不便をおかけいたしますが、再開後の美術館を一層快適に、安全にご利用いただけるよう、最善をつくしてまいります。

(学芸員 三谷 渉)

河野愛 灯台へ、

布、陶やガラス、収集した骨董、写真などを複合的に用いながら、場所や人の記憶、時間をテーマにしたインスタレーションを発表し続けている河野愛(1980～)の近作を紹介します。

河野は2007(平成19)年に京都市立芸術大学大学院美術研究科染織専攻を修了し、近年は、「Soft Territory かかわりのあわい」(滋賀県立美術館/2021)、紀南アートウィーク(同実行委員会、和歌山県/2021)、なつやすみの美術館14 河野愛「こどもの、と」(和歌山県立近代美術館/2024)などで作品を発表しています。

今回は、灯台を記憶や時間の標識として河野の作品を象徴的に表す言葉とし、展覧会のタイトルを「灯台へ、」としています。田辺市立美術館と熊野古道なかへち美術館、二つの美術館を会場にして開催します。

田辺市立美術館では、河野の祖父母が営んでいた白浜のホテルのネオンサインの一部を用いた〈I〉シリーズのインスタレーションや映像作品を展示します。〈I〉シリーズは、ある展示では海辺の桟橋の先端にネオンサイン〈I〉を置き、また別の展示では高く積み上げるなど、形を変えて展開してきました。

熊野古道なかへち美術館では、異物や異者を示す古語から名づけられた〈こどもの〉シリーズを展示します。自身の体内から生まれ出た存在でありながら、異者のように感じたという幼子の肌のくぼみに真珠を挟み込んだ河野の私的な写真を用いたインスタレーションや、母としての視点を他者と共有したプロジェクトを展示します。

身近な物や者への親密でありながらも距離をもったまなざしは、河野の制作の一つの特徴と言えるでしょう。「灯台へ、」と題した本展覧会で、河野の個人的な記憶や時間だけではなく、鑑賞者を含めた他者や土地の記憶とも複層的に繋がる作品群を、体感していただければと思います。

生誕120年 村井正誠 -画家にして版画家-

日本の近代美術に抽象絵画の領域を切り開いた重要な画家の一人、村井正誠(1905～1999)の生誕120年を機に、その画業を振り返る特別展を開催します。

村井は岐阜県に生まれ、医師だった父の仕事に従って彦根、和歌山、田辺に移り住み、1913(大正2)年からは新宮で育って、現在の和歌山県立新宮高等学校を卒業しました。その後上京して、新宮出身の西村伊作が創設した文化学院で3年間洋画を学び、フランスに渡って研究を続けます。パリで発表される最新の作品に接するとともに、ヨーロッパの各地を旅して古今の美術作品にも触れた村井は、普遍に通じる表現として抽象美術に関心をもち、1932(昭和7)年の帰国後も自らの制作について探求を重ね、幾何学的な構成の抽象絵画を発表して注目されます。その後も独自の抽象表現を展開し、色面と人の姿などを組み合わせたユニークで情感に満ちた作品を、1999(平成11)年に93歳で亡くなるまで旺盛に制作し続けました。

村井は画家としての歩みの初期から版画の制作にも取り組んでおり、それは生涯に亘って継続されました。版画における色彩と造形の試みは、油彩画における表現とも結び付いたもので、その双方をうかがうことで、村井の芸術への理解はより深まります。本展覧会では、この多彩な版画作品にも重点をおいて展観し、画家であり版画家であった村井正誠の芸術をお伝えします。